# 『チャタレイ夫人の恋人』への一考察

持　田　幸　子

## 1

D.H. ロレンス（David Herbert Lawrence, 1885-1930）の『チャタレイ夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover*, 1928）は，猥褻小説であるか否かで裁判にまでなった社会的問題作である。ロレンスの本国イギリスにおける「チャタレイ裁判」は，1960 年に被告側ペンギン・ブックス社の勝訴に終っている。日本における裁判では，1952 年に東京高等裁判所第 2 審で，訳者の伊藤整（1905-1969）に罰金 10 万円，出版社の小山書店に罰金 25 万円という有罪判決が下っている。(上告は 1957 年棄却されている。)理由はどうあれ，日本では有罪判決後『チャタレイ夫人の恋人』の無削除版は姿を消したままである。つまり日本における公的なロレンス観は，猥褻小説を書いた作家であるという事になってしまっているのである。なんと嘆かわしいことか。実際に国会図書館で調べてみたところ，1950 年に小山書店から『ロレンス選集』中のものとして発行された伊藤整訳の完訳本以外は，どの訳者の訳本を開いてみても，肝心な性描写の部分には冷たく無造作に省略マークが打たれていた。作家にとって自分の作品を勝手に何箇所も削除されて世に出されるほど屈辱的な事はなく，もう削除版などという物は，ロレンスの作品の残骸であると言っても過言ではないのではなかろうか。『チャタレイ夫人の恋人』が社会的問題作となった原因は，ロレンスが伝統的「性のタブー」を打ち破って，「性」を明らさまに健康的に扱い，小説中に生き生きと表現し，男女の理想的「性」の在り方を公に説いた事にあると思われる。

ロレンスは作品の冒頭で「現代は本質的に悲劇の時代である。」[1] と言

っているが，今私たちが生きている時代こそ，はるかに悲劇の時代である。「性」はタブー視されるどころか商品化されている。町を歩けば淫らなポルノ映画のポスターが微笑みかけてくるし，書店へ行けば「春本」コーナーが公然と市民権を得ている。若い男女には，セックスを遊びかスポーツのように考えている風潮すらあり，単にレジャー費用を稼ぐために，何のためらいもなく自分の体を売るような女性たちもいると聞く。このような乱れた性風俗の時代にあってこそ，ロレンスが真剣に「性」を探究し，男女の結びつきについて説いたこの『チャタレイ夫人の恋人』を研究する価値は，非常に大きいと言えるのではないだろうか。

## 2

ロレンスと妻フリーダ（Frieda Lawrence, 1879-1956）は，たくさんの障害を乗り越えて愛し合わねばならなかった。ロレンスは，大学時代の恩師の妻であったフリーダを熱烈に愛してしまい，フリーダもロレンスに会った事で真の自己に目覚め，それまでの生活がいかに空虚なものであったかを実感し，一心にロレンスの愛を求めた。そして 1912 年 5 月初め，彼らはドイツへと駆け落ちした。ロレンスは恩師の平和な家庭を破壊した不道徳者という烙印を押され，同じくフリーダも，夫の信頼を裏切り，子供たちを置き去りにしてまで年下の男にはしった女性として白眼視された。イギリスにおいて彼らを本当に理解した者は，ごく少数の親友たちだけであった。彼らは真に愛し合って結ばれたのであるが，社会には全く受け入れられなかったのである。そのため彼らは，自分たちの愛を守り抜くために，家庭生活や結婚に対するイギリスの因習的道徳と終生戦わなければならなかったのであった。

さらに彼らには，「階級の戦い」があった。ロレンスは，ノッティンガム州（Nottinghamshire）近郊の炭坑町イーストウッド（Eastwood）に生れ，父は炭坑夫頭といった生粋の労働者だった。小さな頃から生活は貧しく，家の手伝いをしたり，物を大切に使う習慣が身についていた。一方フリーダは，普仏戦争後アルサスローレンの知事を勤めたリヒトホ

ーフェン男爵（Baron von Richthofen）の娘で，その育ちから貴族的な自由と強烈の気風を濃厚にもった個性的女性であった。炭坑夫の息子ロレンスと貴族の娘フリーダとは，互いに愛し合いながらも日常生活においてかなりの闘争を繰り返した。例えばこんなエピソードがある。彼女が河で水泳をしていた際，片方の靴の踵がとれてしまい，両方ともぬいで河に放り込んでしまったのを，彼が戒め，彼女も負けじと言い返した。

> He lectured me : "A pair of shoes takes a long time to make and you should respect the labour somebody's put into those shoes." To which I answered : "Things are there for me and not I for them, so when they are a nuisance I throw them away."[2]

こんな所からも彼ら男女の階級と教養の差が明白に現われており，互いの階級を乗り越えて理解し愛し合う事には，多大な努力を要した事がうかがわれる。その上，フリーダは頑健な体をもった貴族的エゴイストであったし，ロレンスも結核という弱い体ではありながらかなりの頑固なエゴイストだったから，２人は絶えず激しい男女両性の闘争をも繰り返していた。それ故にその闘争を通じて，ロレンスは「性」の理想郷を夢想し，それを作品に結晶させようとしたとも考えられる。

さらにもう１つ彼らには，「民族の戦い」があった。ロレンスがイギリス人であったのに対してフリーダがドイツ人であった事が，第１次大戦中彼らに大きな災いをもたらしたのである。1914 年 7 月に正式に結婚が成立して間もなく，イギリスがドイツに対し宣戦布告したため，妻がドイツ人であるというだけの理由で，スパイの疑いをかけられ，家宅捜索２回に及び，1917 年１月にはコーンウォール（Cornwall）からの退去命令まで出された。彼らは民族の差別を乗り越えるために，２人で力を合わせてイギリス社会と戦わなければならなかった。

上記において，ロレンスと妻フリーダがいかにたくさんの戦いをしなければならなかったかについて述べたが，それらすべてがロレンスの『チ

ャタレイ夫人の恋人』に相通ずるものであると思われる。なぜなら作品の主人公たちの境遇とロレンス夫妻のそれとはみごとに一致しているからである。コンスタンス・チャタレイ（Constance Chatterley）は，マルカム・リイド卿（Sir Malcolm Reid）の娘で，従男爵クリフォード卿（Sir Clifford）の妻という貴族階級であるが，恋人メラーズ（Mellors）は，炭坑夫の息子で，クリフォード卿に雇われている森番という労働者階級である。コンスタンスは従男爵夫人として，ラグビイ邸（Wragby Hall）で何不自由ない生活を送ってはいるが，魂の抜けた人のようにいつも心は虚である。しかし森番との愛に目覚めると，再び彼女に生の喜びがよみがえってくる。彼女を信じ彼女にすがって生きている不具の夫を見捨て，高貴な身分をも捨ててメラーズと共に生きる事には，かなりのためらいを感じるが，すべてを失っても真の愛に生きようと決意する。メラーズもコンスタスとの愛を守り抜くために階級を乗り越えて強く生きようとする。そして，コンスタンスとメラーズは，2人で力を合わせてイギリス社会の因習的結婚観と戦って生きようと誓い合う。まさにコンスタンスはフリーダその人であり，メラーズはロレンス自身なのである。フリーダが彼女の回想録の中で『チャタレイ夫人の恋人』の事を，「彼の最後の大力作でした。」[3] と言って称えているのは，ロレンスと妻フリーダが，数々の苦しい戦いを乗り越えて，互いの愛を貫き通した戦闘記録とも言える作品であるからではないだろうか。

## 3

ロレンスが『チャタレイ夫人の恋人』の初稿に取り組んでいた1926年に，彼がイギリスの故郷で目のあたりにしたものは，炭坑の大ストライキであった。炭坑労働者たちは，ひどく貧しい暮らしを堪え忍んで戦ったが惨敗に終り，改悪された条件を入れてまた坑道に降りて行く事を余儀なくされた。ロレンスは彼も坑夫の息子であったわけだから，坑夫たちのみじめな生活ぶりを知りつつ，冷静に自分たちの市民生活を脅かすストライキを押しのけた中産・上流階級の非情な冷たさを憎悪したはず

である。その憎悪が作品中の残酷なクリフォード描写の一因となっていると思われる。クリフォードを，人間的暖か味や思いやりの欠如した貴族階級の代表者として，また労働者を採炭量を上げるために仕える道具に過ぎないと考える炭坑経営者である，資本家階級の代表者として鋭く描き出し，機械文明，物質文明の化身として象徴している。そして，クリフォードの下半身不随を次の様に説明している。

> I recognised that the lameness of Clifford was symbolic of the paralysis, the deeper emotional or passional paralysis, of most men of his sort and class today.[4]

さらにロレンスはクリフォードを，彼の持つ財力をもとに，あらゆる手段を使って名声を得ようとする空しき知識人として描いている。例えばマイクリス(Michaelis)という若い人気劇作家を邸に招くのも，「成功という牝犬神」(The bitch-goddess)[5]の分け前にあずかって，自分も著作家として有名になりたいという欲のためである。つまり，空しき知識人の代表者として，その「知識」なるものの荒廃ぶりを象徴する存在として描いているのである。さらにもう1つ付け加えるなら，クリフォードを精神的堕落者としても描いている。彼は，社会的には有能な炭坑経営者，著述家として認められた知識人でありながら，個人生活の面では克己心を失い，彼の世話をする看護人ボルトン夫人（Mrs Bolton）を母のように崇拝し，赤ん坊のように彼女の胸で甘えるという内面の堕落をみせている。したがってロレンスはクリフォードという人物を，富と機械文明の化身であり，人間精神の堕落の象徴として描いていると思われる。

機械文明と合理精神の象徴であるラグビイ邸に対して，森は生きた静寂の場として描かれている。ラグビイ邸では，コンスタンスにとって，何もかもが死んだも同然であるのに対して，森ではすべてのものが静かに息づいている。彼女は森番メラーズが差し出した雛鳥をそっと手に受

け取ると，微小な生命の震えとぬくもりを感じて，感動のあまり思わず涙を流した。そして自分の中の「女性」が放棄されているという事の苦悩を，いつになく鋭く意識した。メラーズは彼女に深く同情し，彼女を小屋に連れて行ってやさしく交わり，彼女の「女性」を蘇らせた。それは「情事」などという遊び的なものでは決してなく，もっと人間らしい暖かい交わりだった。彼女はそれを「無限な慰藉と救いであった」[6] と感じている。ロレンスがこのコンスタンスという女性を創造したのは，セックス，妊娠，出産を単なる生理現象としてしかとらえていない当時の女性たちへの警告ではなかろうか。イギリス近代産業のもたらした科学万能主義は，生命の神秘のベールをはぎ取り，何でも頭だけの理屈でかたずけ心で感じようとはしない「進歩的」女性たちを生み出した。しかしコンスタンスは，新しい生命に触れ涙まで流す純粋な女性として描かれている。

チャタレイ夫人の森には，生命の神秘と感動とが満ちあふれている。メラーズは，密猟者から森の生命を守る森番であると同時に，コンスタンスの苦悩に救いの手をさしのべ，彼女の純粋さや母性本能を守ってやる神の様な存在ではなかろうか。炭坑やラグビイ邸をリアルなタッチで描いているのに対して，森の世界は，比喩を多く用い詩的に描いている。この描き方によって，ロレンスは，文明と自然，機械と生命，言葉と沈黙の対比を試みているようである。チャタレイ夫人の森でのメラーズとコンスタンスの交わりは，単なる行為そのものではなく，互いの魂と魂の交わりであり，生命の神秘と歓喜の象徴であると思われる。そして，森は静かにそれを見守っているのである。

## 4

ロレンスが理想とした男女の結合がどんなものであったかについて考えるには，劇作家マイクリスとコンスタンスとの交わりと，森番メラーズとコンスタンスとの交わりとを比較してみる必要があるであろう。マイクリスの生き方や思想は，同時にその性行為と照応している。ロレン

スは，性行為を単なる行為としてではなく，その人間の意識の現われであると考えているらしい。希望を好まず，孤独を好み，本当に恋愛に熱中する事のできないマイクリスの性分は，肉体生活の面に大きく反映し，コンスタンスの「女性」を円満な形で展開させない。彼の性行為は，女性をいたわりながら一つに交わるというのではなくエゴイスティックに自分だけの満足を求め，相手の女性への肉体的思いやりのない事が特色である。しかしコンスタンスには，希望を持たずに恋愛する彼の思想も，その反映である性交の在り方も理解できなかった。メラーズのセックスに対する思想は，マイクリスのそれとは全く正反対のものであり，彼は次の様に言っている。

> 'I could never get my pleasure and satisfaction of her unless she got hers of me at the same time . . . I believe if men could fuck with warm hearts, and the women take it warm-heartedly, everything would come all right. It's all this cold-hearted fucking that is death and idiocy . . . Anything for a bit of warm-heartedness.'[7]

この考え方は，ロレンスのそれを代弁しているものと思われる。女性に対して冷酷で，残忍なまでの服従を要求するエゴイスティックな交わりではなくて，男女双方が互いに肉体的思いやりを持ち，優しい暖い心で融け合う交わりこそ，ロレンスの理想とした男女の結合の在り方なのである。日常生活において，男女は互いの自我をぶつけ合い対立を繰り返すものだが，交わりにおいては，互いの自意識を超越したやさしい接触により，一つになれるのである。ロレンスの考えでは，「セックス」とは男女両性間の暖かい生命の交流であり，「偉大なる統合者」なのである。彼は男女の性行為について次の様に言っている。

> The great river of male blood touches to its depths the great river of female blood . . . Two rivers of blood, are man and wife, two distinct eternal streams, that have the power of touching and

communing and so renewing, making new one another, without any breaking of the subtle confines, any confusing or commingling. And the phallus is the connecting-link between the two rivers, . . . [8]

上記のように，ロレンスが求めた男女の交わりとは，表面上の単なる行為としての交わりではなく，深淵で原始的な，裸の男と裸の女としての血と血の交わりなのである。生まれも育ちも，階級も，貧富の差も，考え方の相違も，すべて超越した没我的な，暖かい血の交わりなのである。そしてその交わりは，新たな生命を誕生させるとともに，男女双方に新たな活力を与えるものなのである。

5

ロレンスは，学校，教会，家庭でのお上品な「禁欲主義教育」が招来した「性」への「秘密性」が，何よりもセックスを歪めつくし「罪悪視」させ「猥褻視」させた原因であると考え，下記に示す信念に基づいて，『チャタレイ夫人の恋人』を世に出した。

I want men and women to be able to think sex, fully, completely, honestly and cleanly.[9]

そのため彼は，「17歳になったら，この書をすべての娘に与えるがいい」[10] と豪語する程この作品を健全な書として考えている。つまり彼は，「猥褻視」の原因となっている「秘密性」を「疾患」と呼び，「この疾患に対処する方法は，性と性への刺激を携えて，公の場に出てゆく事である。」[11] と考え，「性」を秘密裡から公の場へ持ち出したのである。「猥褻視」を追い払うためには，ぜひとも「秘密性」の打破が必要であると考えたのである。しかし大衆の大部分は，彼のこの「秘密性」への挑戦を

「露骨さ」と誤読し，ただセックス行為を描いているからという理由で，猥褻小説と決めつけてしまった。しかしながら作品中の性描写は，概念的，抽象的，心理的であって，ベッドの様子，彼や彼女の肉体の形，色，動作などの具体的視覚的描写は行われておらず，「春本」とはその点全く趣を異にしており，ロレンスはセックスをいやらしい興味本意な遊戯的なものとしては決して描いてはいないのである。

彼が小説に描き出したものは，男女の日常的「性」の営みに過ぎず，夫婦の大切な「生活」の一部であり，夫婦の絆であり安らぎなのであった。それを公に解放すると，なぜ猥褻視されてしまうのか。セックスを罪悪視する事は，夫婦を否定する事であり，ひいては新しい生命の誕生を否定する事にもつながるであろう。ロレンスもこの点私と同意見であろうが，彼はそれを別のとらえ方で表現している。

> Sex and beauty are inseparable, like life and consciousness. And the intelligence which goes with sex and beauty, and arises out of sex and beauty, is intuition. The great disaster of our civilization is the morbid hatred of sex.[12]

彼の考えによれば，セックスと美とは同一のものであり，セックスを嫌う事は，すなわち美を嫌う事になるというのである。西洋絵画において「性」は実に豊かに描かれている。男女の裸の肉体は今にも動き出すかのように有りのままに生き生きと描かれている。ロレンスは作品中の性描写において，性交そのものは極く簡単にしか扱っていないが，男女の裸の肉体の美しさについては，特に賛美して描き出している。西洋絵画が人間の肉体そのものの美しさをためらわず表わして美的に高い評価を得たのであるとすれば，ロレンスの描いた男女の肉体の美も，同様に評価されるべきではないだろうか。なぜなら，絵画として描いたか，小説として描いたかという手段的相違であって，その対象は全く同じものであるからである。したがって，私もロレンスの言う通りセックスは美で

あると考える。そこで上記に引用した彼の言葉を私なりに解釈すれば次の様になる。男女が本当に愛し合い，自然に互いの肉体を求め合っての性交であるならば，それは美であり，決して嫌悪すべきものではない。それ故，現代文明は「性」を健全な美として解放しなければならない。このロレンスのうったえを，作品の中で代弁し実践したのが主人公コンスタンスとメラーズであったのであろう。

『チャタレイ夫人の恋人』は，イギリスにおいても日本においても，猥褻小説か否かで社会的にもめにもめた作品であるが，セックスが罪悪視，猥褻視され，隠れて秘密に楽しむべきものと考えられていた時代にありながら，公に男女の理想的結合の在り方を示し，「性」を全く清潔で健全なものとして解放しようとしたこの作品の意義は大きいと言えよう。そして，ロレンスほど男女の「性」の在り方を真剣に見つめ，生涯をかけて探究した作家はおらず，ロレンスほど「猥褻」を嫌い真の「純潔」を願った作家もいないであろう。彼自身次の様に言っている。

But even I would censor genuine pornography, rigorously.[13]

「猥褻」に対して誰よりも憤りを感じて「検閲」を望んでいたのは，まさにロレンスその人であったのである。

**Notes**

[1] D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (1928 ; rpt. Harmondsworth : Penguin, 1982), p. 5.

[2] Frieda Lawrence, *"Not I, But the Wind . . ."* (1934 ; rpt. Carbondale : Southern Illinois Univ. Press, 1974), p. 39.

[3] *Ibid*., p. 169.

[4] Lawrence, *Apropos of Lady Chatterley's Lover* (1930 ; rpt. New York : Haskell House, 1973), pp. 59-60.

[5] Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, p. 22.

[6] *Ibid*., p. 120.

[7] *Ibid.*, p. 215.
[8] Lawrence, *Apropos of Lady Chatterley's Lover*, p. 43.
[9] *Ibid.*, p. 10.
[10] *Ibid.*, p. 13.
[11] Lawrence, *Sex, Literature and Censorship* (rpt. London : Heinemann, 1955), p. 206.
[12] Lawrence, *Selected Essays* (1950 ; rpt. Harmondsworth : Penguin, 1981), p. 14.
[13] Lawrence, *Sex, Literature and Censorship*, pp. 202-03.